

不五滴集是

一名談海集

六

庫文閣内

内閣文庫	
番號	和 34377
冊數	19 (17)
函號	210 161

共二十



玉滴隱見卷第三十

目錄

江戸町中押並大躍 夏

高嚴院殿御法夏二付
控罪之族御赦免之夏

黒田甲斐守家来神田橋御番所飯二

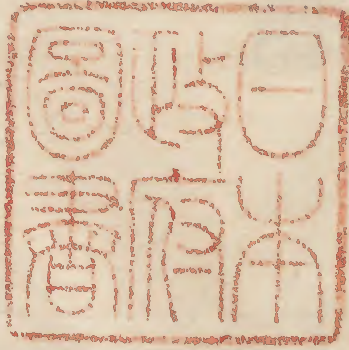
于喧噪夏

福村長右衛門依野半兵衛流刑夏

関口作右衛門日子息切腹夏

仙洞御所御土藏八盗人入夏

関書夏



酒井雅乐从忠清弘文院春舟ノ言葉
御呵之夏

酒井雅乐从忠清御法度ノ外ノ饗應
少呵玉ノ夏

似セ手形依露顯新罪之夏

松平中務太補昌勝家臣中嶋將監被
追放夏

追放夏

西久保鞆屋之権平ト云者爰
生有夏

生有夏

井伊掃部从陪臣口論夏

御祐筆上原守右衛門逢闇討夏



玉滴隠見卷第三十



江戸町押並大躍之夏

延宝五年六月ノ比ヨリ冬ハカケテ江

戸中ノ所々ニ於テ夜ノ四ツ過九ツ時

分ヨリ毎夜躍申候也後々ニハ屋形船

ニテウカシ出テ躍ニ夏前代未聞ト云

屋敷方ハモヤトワレテ行ケリ其躍ノ

拍子サセクナリ叔躍裝束ノ入用金其

所ニ依テ或三四拾兩或五六拾兩ノツ

イハ有シトナリ此躍次第々々ニ後申



二付于冬二至于御制禁卜十儿

高嚴院様御法夏怪罪御赦免夏

延宝五年二六月高嚴院様ノ御法夏二

付御赦免ノ面々

盗物捲領ノ松平主税夏可被召出ノ

旨也

大宮御免但江戸二八

笹山新八

江戸追放

本所六丁目長兵衛

日新

日所徳右衛門丁伊兵衛

日新

境丁白銀町 徳右衛門

日新

吉村 吉兵衛

日新

小傳馬所半兵衛

日新下妻西町江戸二

七兵衛

所追放御免

下妻松置村兵右衛門

附母日妻共二

駿河沼津

日新

源灰兵衛

日新

遠及小立村太灰兵衛

信及ノ者也江戸追

放御免 仁右衛門

所追放御免

武及越谷領傳右衛門

出籠

内花田村喜兵衛

日新

常及海老四郎兵衛

以上

延宝五年被仰出関書共ノ夏

一延宝五年六月十五日ニ酒井修理太夫
并ニ堀田豊前守右兩人閉門被仰付之
其子細ハ修理太夫ハ御預ノ堀田上野
外正信夏先頃若品小濱ヲ忍出テ京都
ヲ緋細致スニ付テ也

同月廿七日土井信濃守遺領一万石ノ
内五千石願ノ通同姓能登守次男左門
被下之是前廉一類中ト不遂相談末期
ニ及テノ養子タルニ付五千石ヲハ被
召上之也同月ニ肥前ノ唐津領ノ内名

古屋浦ノ近所波ヶ崎ト云所ニ人形ノ
奥有ト也其形稚顔ハ大ニ似テ兩方ニ羽
有テ剛ハ常ノ奥ナリシト云然ハ人
奥氏雞申カ 同年ニ右月国ノ内相木
村ノ山ノ井ニテ水汲ケル下女柄杓ニ
乗テ揚リケル両从ノ亀ノ一其長一寸
八分幅一寸也首ハ左右ハ相双ニテ付
ケリ唐津ヨリ右ノ村ハ五里有之其
亀ヲ城主ナリケル大久保加茂ヨリ公
方家ハ被羨上ケルハ上覧有テ翌日死
ス誠ニ上覧有ケル日迄ノ余ノ程コソ

有難ナシ

延宝五年六月廿四日二寺社奉行ノ小笠原山城守卜板倉石見守卜判形所次第ノ爰言上ニ及候ノ処ニ山城守ハ先輩其上先年父ノ間小笠原山城守板倉石見守太田楨津守此頃ニ可仕ノ旨被仰付之

九月廿五日ノ午ノ刻ニ黒田甲斐守殿家来喧喚反復

同九月廿五日ノ午尅ニ黒田甲斐守殿家来神田橋勤番帰番ノ節中村太右衛

門卜云三ノ傍輩ニ切テカ、リ手負ス

一二百五十石 吉村宅右衛門

是深手大形死去可仕由ナリ

一百五十石 海加團右衛門

右同新

一百五十石 善安右衛門

是深手也

一每足 浅香庄兵衛

即席死ス

一二百石 中村太右衛門

是足遊リ預リ候由即自害ス

石太右衛門力若黨一人討死又
其節太右衛門乱心ノ様ニ申候ハ氏意
趣有之ニ付右ノ仕合ト云々然氏公爰
御番故許判區々十リ

福村長右衛門依野半兵衛流刑之
夏

一七月廿六日ニ御代官福村長右衛門依
野半兵衛一數年引負仕御勘定不相成
候ニ付今日評定所ニ於テ大罪依渡守
實岡友十郎申渡ニテ曰兩人共ニ雖被
仰付切腹御用捨有之テ流刑被仰付之

旨也右福村長右衛門同勘右衛門同杵
之助同次郎八佐野半兵衛以上五人三
宅嶋一遠流被仰付之次ニ長右衛門所
縁ノ順教出家十リ江戸追放被仰付之
訖

関口作左衛門日子息切腹夏

一日月日所ニ於テ御代官関口作左衛門
一先年富彦兵衛果候時分大分引負仕
御勘定仕上不罷成候ノ処ニ手代関口
作兵衛申上候ハ彦兵衛支配ノ御代官
所被仰付候者彦兵衛引負仕候所ノ采

金以連々上細可仕之旨訴訟申上ニ付
テ作兵衛至被召出也然ニ當作左衛門
代ニ至迄右ノ引員上細不仕候殿重々
不届ニ被思召ニ付作左衛門并世悻氏
ニ至ルニテ切腹仰付訖
右作左衛門至ハ最前ニ浅野又市郎ハ
御預ケ作兵衛虎藏此二人ヲハ加之凡
甲斐守ニ御預ケニ付テ右両所ハ日根
野權十郎相越件ノ趣ヲ達ス
仙洞御所御土藏ハ盗人入ニ夏
一延宝五年ノ八月始ツカ夕トイエリ仙

洞御所ノ御土藏ハ盗人入候テ銀子ヲ
三十貫目盗取テ跡ニ一首ノ詠歌ヲ置
ケルトナニ其哥ハ

浅クニキ憂ニ我身ハ捨スニテ

耻ニスツルソ命ナリケリ

誠ニ凡流ナル盗人ニテソ有ケル此等
觀覽ニ入十八如何アウニカ

関書夏

井伊玄蕃及直置家中ノ諸侍并町人次
ニ領内ノ百姓等ニ至迄借玉ハリ候金
子ノ覺

一百石ニ付拾四兩 二百石ニ十八兩

二百五十石ニ廿二兩是ヨリ上八五十

石ニ四兩増ニ玉ヲト云云

一中小姓ニ八十兩步行侍ニハ七兩宛足

輕ニハ三兩ヲ、給之

一町人百姓等一玉ハリ候金子ノ高ハ何

程ニ負數不兼也

一延宝五年秋山十右衛門弟ノ十郎右衛

門息男其身ノ兄ヲ切殺シ申候是意趣

力乱心力其子細ヲ不兼候

一八月三日ニ布施孫兵衛算新兵衛茨河

六左衛門右三人因門御免是ハ御臺様

御佗言被遊候ニ付テ也

一月廿日亥刻ニ御臺様費去摺別ハ為日

蓮御宗ト虫比依御遺言被改天台御宗

ニ付テ於東叡山御葬礼有之依之日光

御門主御導師ナリ

一延宝五年八月九日ニ今度堀田上野外

至松平阿波守一御預テニ付テ彼家来

相殘分リハ松平隱岐守松平越中守服

坂中務少輔一御預テナリ因茲久世大

和守完一酒井越前守ヲ招キ右ノ趣ヲ

大和守傳之

酒井雅乐从忠清弘文院春舟ノ言

葉御呵之夏

一延宝五年ノ八月ニ酒井下總守殿宅へ
曰姓雅乐从殿ヲ招請被召ニ時其相伴
ニ弘文院春舟ト久保吉右衛門正之
参ラレテリ四方山ノ咄ノ有ケル時春
舟ノ曰千代姫君ノ御イヲハ千代姫君
ノ御方ト申エ清泰院様ノ御イヲハ清
泰院殿ト申サレテリ叔雅乐从殿ハ右
御西所様ノ御イヲハ度々様ト申玉へ

氏弘文院ハ猶御方殿トヨリ外ニハ誤
テモ不被申候ノ由雅乐从殿被申ハ千
代姫君様ハ大猷院様ノ姫君様ナリ亦
清泰院様ハ水戸黄門ノ御息女是亦大
猷院様ノ御養女ナレハ尤昔ハ殿ト云
フイ賞玩タルヘテレ氏今ノ世ニ至テ
ハ殿ヨリハ様ト云イフ貴敬スルナレ
ハトテモ今ハ兔角様トコソ云ヘケレ
ト仰候ヘトモ春舟ハ猶モ御方殿トハ
カリ申玉へハ雅乐从殿以ノ外色ヲカ
ヘテ左腹ニ玉ニ御呵アリシトナリ

酒井雅乐及忠清御法度ノ外饗應

ヲ呵給フ夏

一同月ニ亦雅乐及殿ヲ細川越中守經利
ノ宅へ招請有ケリ惣ニテ雅乐及殿ニ
カキラス御老中ヲ諸家へ御申請ノ時
ニハ二汁七菜ニ極リタル一ニ然ルニ
今日ハ二汁十五菜十リ依之雅乐及殿
氣色替テ内證ニ公儀ノ御料理人誰人
氏不知コレヲ被召候テ仰候ハ自今達
モ兼テノ御條目ノ通りヲハ存コタル
ヘシタト一亭主方御馳走ニ献立等儀

々敷書迄シレ候トモ其夕メ我等式被
為呼タリ丸様ニ結構ハ御制禁ニテ御
坐候ト申テ羨留ラシケル筈ノ人十ニ
ニ如斯法外ナル仕形ハ此雅乐及リ世
ノ人ノ評判ニサセシトノ一カトテ散
々呵玉ヒテ右ノ引菜トモヲコトクク
トラセラレテ御法ノ通りニ七菜残サ
シテ其饗應終テ早々ニシテ退出アリ
シトナリカヘワテ不馳走ノ至リテ云
云

關東筋高汝上リ所々損亡之夏

一延宝五年九月九日ノ晚水戸殿南領ノ
湊ト云所ハ高汐上ケテ民屋三十軒流
失又男女三十人溺死又水戸御城下ハ
ハ海辺ヨリハ二里阻申候故無夏ト也
一月年十月三日九筋甚雨疾風秋月依
渡守殿領内ノ経福宮ト云所一万石程
損亡有之所謂

一稻九千三百二十駄 流失
一河濱千五百俵 右曰
一田地百五十五町三反 砂入亦ハ水荒ニ
有之ト也

内一町六反ハ畠十リ

一井千阿除堤ハ手汝漬ノ所々悉ク破損

内十四町ハ流失又

一倒家 二十八軒

一男一人 溺死有

一馬百廿五疋 流死

内一疋ハ牛

一高舟

以上是迄ハ秋月依渡守殿領内之方

一薩戸領ニテ高船一艘破損水主二人溺
死

一月領ニテ俄ニ池ニツ出来ス

右ノ廣サ一ツハ六千坪又一ツハ六

百坪亦一ツハ七百坪有之深廿八四

尋五尋又八十尋計ノ所ニ有之此外

取々ニ小池幾所ニモ出来ス

一方々ニテ山ニ町三町程ツ、崩申候

一蕎麥 粟 大豆ノ類大分流失ス

以上是迄松平大隅守殿領分十リ

一稻六百四十把 流失

一河濱二百七拾五軒 右同

一井園百三十九ヶ所 破損

附埋通等數多流失ス

一堤十ヶ所破損又間敷二ノ九百十八間

一倒家 四十六軒

一男女三人 溺死

一馬七疋 流死

一楨板八十枚 流失

一舟大小四艘 破損

右ノ外ニ破入ノ田地數ヶ所虽御坐

候未夕其分ニカ卜知レ不申候ニ付

注進不仕候由也

以上是迄伊東出雲守殿領分之内十

同日九月九日上総国高沢アカリ候夏

一 小濱浦卜云所ニテ倒家廿五軒

一 男女九人 溺死

一 和泉浦卜云所ニテ倒家ノ数未夕ニシ

不申候由田畑数ノ所是亦負數不知候

一 男女十三人 溺死

一 岩舟卜云所ニテ倒家四十軒

一 男女五十七人 溺死

一 東浦見村卜云所ニテ倒家五十軒

一 男女九十七人 溺死

一 屋依志戸村卜云所ニテ倒家廿五軒

一 男女十三人 溺死

以上是迄阿部伊与守殿領分ナリ

阿部播广守殿領知御宿浦卜云所ニテ

一 倒家 三十軒

一 男女 三十六人死

植村土依守殿領分ノ郡石小村卜云所

ニテ 三十軒

一 倒家 六軒

一世悴二人 死

同人領分ノ新宮村卜云所ニテ

一倒家 十七軒

一溺死 二人

以上

板倉与五右衛門殿領知ノ河津村卜云

一所ニテ

一倒家 十九軒

一溺死 三人

以上

右ノ通ニテ其後毎日地震昼夜ハカケ

テ十八度廿度ニ及ヘリ卜申候

同日ノ夜ノ四以時奥品岩城領ハ毛津

波上ケル

一民屋四百九十軒余流失セリ

一人馬百五十溺死

内廿七八馬ナリ

右岩城ノ分ナリ

安房上総ニ石門断然氏民屋人馬ノ数

ハ不知ナリ

似手形依露顯新罪之変

一延宝五年十月十日板倉市正重太ノ組

小普請ノ名取八郎左衛門卜頃日鷄殿

八之助卜申似名ノ表判御切米手形御

天守番以杉原又兵衆裏判ノ似也才仕
浅州御藏書カハ所ハ出之候ノ処ニ彼
御役所ニ於テ改出之諛義人上奉行取
一彼之御穿鑿ノ処ニ似也判ニ給毎之
二付テ彼八郎丸門并男子卜毛ニ斬
罪ニ被仰付十リ為檢使彦坂源兵衆其
外御步行目付被遣之也

松平中務太輔昌勝家臣中嶋將監
被追放也

一十月廿三日ニ松平中務太輔昌勝ノ家
臣ノ中嶋將監一不届ノ子細有之付テ

押込被在道候然所ニ將監ニ組仕夕儿
諸士卜毛七十余輩有之内ニ取分其以
取仕候ハ江戸留主居ノ田中武兵衆也
依之カノ武兵衆ヲ去ル十五日ニ両腰
ヲ取目シテ棄物ニテ越前ニ被差遣之
余等一畢テ武兵衆ヲハ斬罪ニ被仰付
訖將監等ヲハ被追放也卜也其外ノ諸
侍卜毛ハ未落着卜云々

糺屋ノ權平卜云者愛宕ノ利生有
也

一十一月廿四日ニ西久保榎坂ノ糺屋權

平ト云フモノ爰宕へ参詣ニテ下山ノ
刻ニ二玉門ノ前ニシテガニハイトノ
ソハジアリト云假名書ノ紙札ヲ拾ヒ
肝ヲ以テ急キフタメイテ家ニ飯リ
何ノ口ケモイハスニテ家財氏ヲ悉土
藏穴藏へ取細サセ只今凡下ノ出火ノ
ヤウニウロク夕へケシハ女房モ下人モ
是ハ今日爰宕へ被参テ下向ニ玉フト
否如此ナシハ疑モナク彼御神ノ御罰
ヲ加ラシテ乱心ニナラセラシタリト
テ妻子并寮人等悲ニ夕へスニテ神子

山伏ノ宅一人ヲハシラカニ祈念ヲ專
ニ仕ケルトナシ其如クニ有テ其終九
寢ニメ明シケルカ翌日五日ノ晩方ニ
己カ家ノ裏ノ借屋ヨリ大夏出来ノ其
辺皆々焼ニケリ然氏家主ノ權平イハ
昨日ヨリ諸道具氏ヲ不残取仕廻夕ハ
ミ障子等迄悉ク土藏へ入置ケシハ元
来家ヲハ焼タシ氏財宝ハ悉ナカリシ
ト也扱權平カ廿四日ニ拾ヒタル紙札
ノ一ヲ悉ク承候へハ廿四日ハ爰宕ノ
御縁日ニ付テ諸方ヨリ諸高人氏相湊

ヒケル然ルニ其日金餅糖ノ菓子ヲウ
ルモノ平假名ニテ紙ニコシヘイトノ
リハシアリト書タリケル札ヲ風ノ吹
チラシテ有シヲ權平拾ヒテ己カ名ト
心へ右ノ通トナリ思ヘハ是モ誠ノ御
告カモ計難シト人皆叫ケリ

井伊掃部以陪者口論矣

一十一月廿八日今日於南鍋町井伊掃部
及殿家来ノ陪者氏酒ニ給醉ワ、中間
トテ口論ヲ仕出、其相手ヲ切テ退候処
ヲ町人氏跡ヲ慕ヒ追掛ケレハ教奇屋

橋御門ノ内へ逃込申候所ヲ御門ノ面
々不留シテ早々駈ヌケテ堀周防守殿
上屋敷へカケイラント仕候所ヲ夕バ
リヲ閉門ヲサレ途ニ迷フ所ヲ跡ヲ
慕ヒシ町人共コレヲ捕テ兩町奉行へ
渡シ申候ナリ

右ノ節教奇屋橋御門番ハ久留嶋信濃
守殿ナリ依之其日當番ノ番以兩人ハ
追放其外足狂人足等以上十七人ハ極
月三日ニ成敗之ト云

御祐集上原宇右衛門圍討逢ニ夏

同年月九日ノ夜明方ニ本所三ツ目
ノ橋ノ末ニ被居タル上原宇右衛門是
御祐筆ナリ其所ヘ何者ヤラシ二人參
テ宇右衛門ヲ切殺シテ去退ケリ去レ
兩輩ノ者ニモ宇右衛門手ヲ負セ申ニ
付テ道筋兩國橋ヘカケテヒシト血ヲ
引テ有之依之新敷手疵ノ者有之候ハ
、申出ヘキ旨ソレヲ隠シ置後日ニ相
シレ候ハ、重罪ニ可被行旨急度御融
ナリ如期相敷御食養ノ故彼討テ退夕
ルヤツ人家ニ立寄テナラスシテ品河

御殿林ノ中ヲウロツキ廻リシヲカシ
手負ナシハウサシ者ナリトテ所ノ者
召捕之所奉行所ヘワタシケリフノ後
敷日御食養有之彼モノヒツ定上原ヲ
切殺シ申ニ紛コレナキニツキ小塚原
ニ磔ニ懸ラレシケルトナシ

十二月廿二日ニ天野甚左衛門ノ先頃
誥番ヲ令失念ニ付テ今日閉門被仰付
ノ旨同役神尾市左衛門遠山半左衛門
右兩人召之被傳命也

同廿四日ニ京極丹後守高国ノ於南部

病死依之為檢使村瀬伊左衛門被遣之

玉滴隱見卷第三十畢

玉滴隱見卷三十一

本目錄

百人組乗物下場二于同心与国野孫

九郎殿瀧^{コシヤ}口論^{シヤ}夏

有田源右衛門火出二付三年無足二

被成夏

水野周防守元役二被仰付夏

附火夏火元御余議夏

江戸北八丁堀捨金屋甚兵衛乍生火

車二被取夏

南鍋町伊達女之夏

桃井又七郎油井六郎及糸門口論夏

江戸木船所冬木大伊達女之夏

好色野郎数寄女之夏

奥平源八大鴛御免直二彦根、百人

扶持二而被召出夏

江戸町同心堀町ノ大夫元ノ者卜口

論之夏

長谷川半平与町奴子明鉢七兵衛喧

啖夏

木挽町橋材木町間二于本郷治大夫

意趣討之夏

江戸愛宕山二名譽ノ捨物之夏

高巖院様御法夏怪罪御赦免之夏

延宝六年九月十月関傳御汝汰之夏

陸奥国仙臺二于親二孝ヲ盡有徳二

成夏

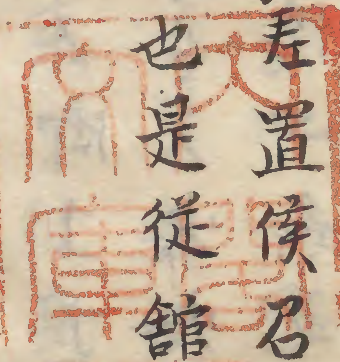
玉滴隱見卷三十一
延宝六戊午ノ年ノ正月三日ノ夜於御
城御謡初ノ時何モ御譜代大名其外登
營也然ルニ其夜百人番所ノ前ニシテ
蒔田權之助同心ノ者岡野孫九郎駕籠
ノ者藪クサヲノミケルヲ制シケレ氏聊承
引不申候付棒ヲ振上ケレハ彼陸尺其
同心ノ棒ヲ奪取テ終ニハ同心ヲ取テ
十ケ、リ此時番所ノ面々立廿八キニ
程ニ諸人色メキアヘリ此ノ孫九郎

御井又七身向丹八身反出口の事
江戸本歌向冬木大伊達少之度
赤也野中長清一之度
貞平源八女長海免直三老板八百人
秋持三由利少之度
二戸野同心堀河ノ大史光ノ者卜口
御譜代
新井固高重三守録三替也書音斷望
延宝六年六月十日同前御城本立之度
高島重頼輔太守助親親御好度三度大
御譜代御城本立ニシテ奉リ替御城之度

兼テ其場ノ罷出口カ陸敵共ノ法外ナ
ル形ナ故公美ヲ憚テノコヨリ直ニ下
宿ノ蟄居ス其後御僉美ノ上同心入手
向ニ夕ル陸尺三人ヲ斬罪被仰付ケリ
有田源右丞門火出ニ付三年無足
被成夏

日十一日ニ午込ニ於テ出火其火元ハ
館林相公ノ御書院番ナリケル有田源
兵丞是伊賀組ノ椎名兵右丞門カ地ヲ
カリテ居取トス右源兵丞其日ハ當
番ニテ在宿不仕候トイハレ頃日取分

火ノ用心稠敷被仰付候之処ニ右ノ仕
合故源兵丞美三年無足ニテ逼塞被仰
付其上留主ニ差置候召仕二人ヲハ断
罪可申付ノ旨也 是從館林相公御仕置
也



水野周防守元役被仰付夏 付火夏
節火元ノ美御僉美夏

同日ニ大御番土屋兵部少輔跡役ヲ水
野周防守ニ被仰付之旨右周防守ノ先
年御目付ノ宮崎助右丞門卜ノ申分ニ付ニ
大御番以テ被召放其上閉門被仰付候

此ニ今年亦元ノ御役被仰付一周防
守生前ノ面目ヲホトコサシケルトノ
右助右承門トノ出入ノ一ハ記前
月十二日ニ被仰出ケルハ自今以後火
ヲ出シ申候其火元ヲハ^{キツ}佐ト可被行瓦
罪之旨也亦其町ノ名主五人組共ヲハ
籠舎可仰付トノ御一十ニ氏曰獵ヨリ
春ハカケテ第々ノ出火ニテ候一氏火
本ノ御命迄モ終ニ無之也其後ハ火消
衆ニ御尋ノ時何モ付火ノ由被申上付
テ也ト云ク

江戸北八町堀^子捨金屋甚兵衛乍生
火者取レシ変

月廿一日ニ江戸北八町堀ノ捨金屋ノ
甚兵衛ト云モノヲ去十九日ノ晚景ニ
七旬計ノ老女来テ彼甚兵衛ヲ相尋申
候其節留守ノ由申候ハハ罷飯シカ亦
翌日廿日来リケリ此時モ留守也亦々
廿一日ニ右ノ媿来リテケリ其時ハ宿
ニ居申候ニ付テ甚兵衛彼老女ニ出會
候ハハ媿カ曰ク其方一太悪人故闇魔
玉ノ勅ヲ兼テ此媿迎ニ参リ夕リ早々

支度有テ冥途へ趣キ玉へワシ案内セ
ント申候へハ甚兵衆彼老女ヲ乞卜白
眼テ申様ハアノ氣遣ヒ燒ヲ男共出テ
引出メウテ夕、ケ卜下知メ追出シケ
レハカクスル氏吾ハ品川ノサ、ナミ
へ行テアレニテ待也急ケクト云捨テ
行方ミラス成ニケリ人々不審ヲナス
取ニ程ナク甚兵衆氣ヲ取失ヒ死ニケ
レハ一敷立コワツテ悲歎限リナケシ
氏是非ナク頼ヒタル寺淺草ニ有シカ
ハ則其寺へツレ行テ沐浴サセントテ
棺ヨリ出之見テアレハ片身卜片股ヲ
ハ引キサキ取ケリ是ハ最前ノ燒火車
ニテカレガヒワサ成ヘントイハヌ者
ハナカリケリ此ノ江戸中ニ隠レノア
ラサレハ甚兵衆カ歎ヲ繪圖ニシテ賣
ケリ

町同心桃井又七郎油比六左衛門
口論之良

二月廿三日ニ町奉行嶋田出雲守方ノ
同心桃井又七郎ノ河瀬穀町ノ湯へ入
候ノ知ニ又七郎ヨリ前ニ宮崎若狭守

組ノ与力油比六郎右衛門モ入テ居タ
リケリ相互ニ町奉行取ノ役人共十レ
ハ見知リコエノ処ニ六郎右衛門方ヨ
リ又七郎方へ中々法外ナル慮外ヲ仕
カケ申候ニ付テ又七郎腹ニスヘカ子
早々ニシテ湯ヨリ揚リコソ罷出テ序
服ニ扣テ六郎右衛門カ通ルヲ待請居
タル所へ六郎右衛門参リタリシコト
ラヘテ右ノ有増ヲ申折テ果スヘキト
割カケ候へハ六郎右衛門至極誤リ又
ル由ヲ申降参リコウヲ見テ其所ノ町

人共立出テ色々ト取暖異変ナク有シ
ト也然レ此等兩奉行取へ洩園へ申ニ
付穿鑿ノ上油比六郎右衛門ニハ若列
ヨリ暇ヲ出シ玉フ又七郎ハ不苦ト
ノ妾ニ候ツレハ是非共ト暇ノ妾申込
候ノ故被任其意ニケルトソ

南鍋町伊達女之事

南鍋町屋根屋ノ九左衛門カ女房ヲ藤
見丹前ト云フ有其妾ハ一年上野ノ夜
見ニ彼女房罷リシニ其风流ノアリサ
マシ見テ旗本メイタル清ラカ若侍

二三輩来テ彼女ヲ奪取テ茶屋ヘイサ
ナニ行テ心ノ終ニ乱舞ノ酒宴ヲ催シ
薄暮ニ及ニテ飯ニケルト十二其ノ
於塙町木挽町ノ藤見丹前ト云狂言ニ
シケリ舅ハ山王町ノ屋根屋ノ太右衛
門ト云カシカ娘ナリ其名ヲ得タル伊
達モノト云

江戸木船町冬木大伊達女之夏

水船町ニ冬木善太郎ト云大分限ナリ
町人若死ニケリ然ルニ彼後家其後船
町ヨリ京橋ノ南ニ有ケル家ニ移テ弥

郎狂ニニアリ夕ニ終ナル放埒ヲメ天
下ニ冬木後家トイハレテ悪名ヲ取
カ川夕子ハ終ニ川ニテ死スルトハ古
人ノ詞也シカ彼後家節々壞胎ニテ其
子ヲ下シケルカイツソノ時カ下シソ
コナツテ死ニケリ其哥舞妓ノ野郎ト
云ハ木挽町ノ花井才三郎ト云ケル野
郎彼後家ヨリ家屋敷ヲ買テ貫心ニ
不足ナク馳走セウレ一日ノ栄花万日
ヲ送ムカヘシコトナセシトナシ

好色野郎数寄女之夏

弥左衛門町ノ鶴屋四郎兵衛ト云ケル
モノ、後家ノ一是亦其名ヲ取タルア
フシモノ也是モ亦栗田勘弥狂ニシ
テ夏冬ノ仕キセ其外金銀ノ入用共
後家ノ馳走シケル程ニ後ニハ彼勘弥
一ク口カ子ニテ作タル人間ニモアラ
サレハ非番當番共ニ相勤ケル程ニ程
ナク目ノ蠅ヲモ松フ一ナラズ腎慮シ
ケリ誠ニ過タルハ及ハサルニチカシ
トハ大聖ノ御詞ナルヲマイカニ若ケ
レハトテモ夜々毎ニ娼酒ノニツキテ

攻ニ程ニ落城コソ理リナレ取分彼鶴
屋四郎兵衛ト云モノハシワニ坊ノ有
財餓鬼トイハレシ者ノ貯置ケル其財
宝共ヲ邪妄ニ仕ヒ捨ケル後家ノ心コ
ソ大佛ノ柱ヨリハノブトキ女也皆彼
等ハ至誠心ナル女ノ色好ミナレハコ
ソ如斯人々ノ口ノハニカ、リテ筆ノ
スサミにナリテヨシナキウキ名ヲウ
タハレケリ

奥平源八大嶋御免直ニ彦根百人
扶持ニテ被召

延宝六年二月二先年親ノ敵討ニ奥平
源八ノ當四月遠嶋御免是ハ天樹院殿
御遠忌ニ付テ也然ルニ此源八ノ以前
流刑ノ刻井伊掃部以直澄屋敷ハ罷出
敵討申候次第ヲ一々ニ申述候ニ付直
澄被加不便公儀ハ訴訟被申上一命ヲ
申請玉ニ豆尺大嵩ハ遠流ノ取掃部以
ノ曰ク若取節有テ此者共左近御免ノ
蒙リ候ハ、同姓玄蕃以ニ被下候様ニ
奉願之由安友九郎左門近友登之助
ヲ以テ老中迫被仰達候ハハ委細兼届

候ノ間次テノ刻可達高聽之由御返答
卜云々然者當四月彼源八ノ嶋御免乍
去江戸ニハ居住無用ノ由被仰出之付
テ直ニ江尺彦根ハ罷越候ハハ直々ニ
リ百人扶持方給之卜云云

江戸町同心塙町大夫元ノ者卜口
論之夏

延宝六年五月五日ニ江戸町同心ノ宮
本七郎兵衛肥田覺之允望月權右左門
田中安友左門白幡仲右左門友井又助
右六人ノ元ノ塙町市村竹之元力芝居

ツ見物セシトテ叅侯節大夫元ノ者共
ト口論ヲ仕出シ候ノ処ニ同心方ノ者
氏芝居ノ族ヲ侮油断メ宮本肥田望月
此三人ノ者共大小ノ三人ハ欠落シテ
ケリ其由ヲ兩奉行ノ嶋田宮崎被問届
同心共ノ始末不直被存候付右三人ノ
請ニ相立候家持ノ町人ヲ兩人籠舎被
申付ケリ其後教メ余後有テ同廿二日
二宮本七郎兵衛肥田覺之允望月權右
衆門此三人ヲ免罪ニ被申付ケリ叔行
之允ニハ障下ク候ノ間常ノ通ニ芝居

可仕之旨被申渡之也同心共ヲハ被行
斬罪川原モノヲハ此ノ如ク利運ニ被
申付莫定テ其子細コソ有ラメトテ取
々ニ批判ヲハ仕シト也右ノ通故行ニ
允ハ前々ノ如クニ芝居ヲ仕シ所ニ
同廿八日ニ右立退タル三人ノ内田中
安左衆門下云同心恐来テ行之亟カ所
ノ札賣ノ加兵衆左右衆門下云二人ノ
者ヲ切テ立退ケリ右ノ内加兵衆ハ當
坐ニ果夕リ叔安左衆門切又テ申候所
ヲ过番出合防申候所ヲ亦过番ニモ手

ヲ負セテ故十ク立退申候也猶立ノキ
タル三人ノ同心共一味ノ是非共行之
允所ノ役者共弟一二ハ金允仕候者ヲ
討不申シテハ置間敷兩番取ハ書付テ
捧置テハニ付テ行之允坐ノ者共安キ
心ハナカリシト也

長谷川半平ト明鉢七兵衛ト云町
奴子喧嘩夏

延宝六年同日ノ七ツ時分ニ馬代奉行
ノ長谷川半平夏家ノ前ニテ明鉢七兵
衛ト云ケル町ヤツコノ男夕テト口論

ヲ仕出ニ相互ニ抜合セタ、キアヒケ
ルカ半平右ノ肩ナキツキラシ深手十
シハ倒其手ニテ其尻果ケリ其節半平
カ小者出合テ七兵衛ニ二ヶ所手ヲ負
セタリ追テ亦半平宅ニ居タリニ召仕
主人ノ喧嘩ノ由ヲ聞付テ其主ノ差カ
ヘノ刀ヲ取テナシ七兵衛ニ一刀切リ
ケ候ハ共浅手也トカクスル内ニ町人
共棒ヲ入七兵衛ヲ召捕テ奉行所ハ渡
シケレハ則半平妻子ハ下サレケレハ
心々ニ切テ捨ケルトナシ右半平所ハ

依行右京大夫殿上屋敷ノ後口十儿大
工町也

一谷左内坂上寺町長岡寺前ニテ
喧嘩之夏

延宝六年五月十日尾張中将殿御家来
成田六郎兵衛召仕之佐友伊右左門卜
申若黨一谷左内坂上寺町長岡寺門前
ノ津右左門卜申者ノ所ニテ之力キ破
ヲ賣申者卜令口論彼津右左門力取ヲ
一ヶ所左ノ手ノ内一ヶ所手ヲ負也申
候其節田所ノ久五郎卜申之ノ裁人ニ

出候ヲ鼻ノアタリノ一ヶ所手ヲ負也
申候仍之右ノ若黨町奉行所へ召連參
候へハ篋舎申付候此ニ付于千代姫御
方御立腹被遊候ノ故嶋田雲呂被致迷
惑候由ニテ町セツ色々卜取汝汰申候
一氏土屋但馬守殿御取持ニテ彼伊右
左門ヲハ尾張中将殿御家来ノ服部權
右左門市川金兵衛此兩人ノ嶋田出雲
守方ヨリワタサセ被成候ヨシ是ニテ
落着ト相見へ其後汝汰不承候イカサ
二三之内々ニテハ色々卜一六ヶ敷候

テ人ヲコ子申候由取汝汰御坐候ノ
子細ハ分明ニ不承候在内坂ノ町人共
ニ成敗ニアリ申候者有之由也

木挽町下材木町下間ノ橋ニテ意
趣討之夏

同月十日木挽町橋材木町ノ方ノ橋詰
髪工イノ前ニテ年来廿一二計ノキサ
ミタバコウリ奉公人ヲイトアヂニ討
申候此子細ヲ承候ハ古傍筆ニテ意
趣有之付夕ハコ賣ニサマツシ年
来子ラニ申候処一今日此所ニテ出合

詞シカハシ叔夕ハコ箱ヨリ一尺五六
寸計ノ服差ヲ取出シ一刀ニ仕留申候
夏

右ノ意趣ハ後日承候ハ討手ハ本郷
治太夫被討手ハ寺嶋岡右衛門ト申候
何モ古傍筆主人ハ戸川土佐守殿也岡
右衛門當春ヨリ稲葉丹後守殿ニ步行
若黨仕居申候岡右衛門兄ハ土佐守殿ニ
テ百石取テ召舟ヲ預リ居申ト也又治
太夫ハ其節ハ小姓ニテ在シ復ノ下ニ
ヤ涼ニ濱辺ニ罷越舟十トニ乗テ居

侯ヲ固石糸門兄ノ威ヲカリ在外ニ治
太夫ヲ愚口致シカリ侯故治太夫モ負
シト雜言シ口論既ニアヤウカリケル
所ヲ何レモ出合引ケ申候間無夏ニ
成又此ノ主人土佐守殿同玉ヒ兩人
ニ暇ヲ玉リ又此意趣ヲ以テ五年以
來子ラヒアリキ右ノ仕合ト也治太夫
ハ戸川彦四郎殿ニカ、リ居申候間シ
ノヒニ子ラフノ彦四郎殿家來共努
々シラサリシト也叔治太夫ノハカス
リテモカウムラスニテ兩所奉行所へ參
及晚景篋屋ニテ切腹ス

江戸愛宕山ニ名譽ノ捨物之夏

延宝六年午ノ六月八日ニ江戸櫻田愛
宕山ニ名譽ノ捨物アリ其捨物ハ桐ノ
箱ノ長サ三尺高サ八寸幅二尺ノ箱ナ
リ其内ニ美女ノ人形ニ結構ナル衣裝
ヲ三ツキセタリ其小袖ノ入用ノ金小
袖一二付二三兩ヲ、モ造作入可申ト
何モ下墨申候叔其箱ヲハ早速寺社奉

行所へ被指上候則其箱ヲ披キ一覽有
之ニ右ノ羨女ノ骨ノツカニクニ悉ク
釘ヲ步取金子三十兩入テ有之右ノ人
形ヲハ寺社奉行所ニ被留置金子計ヲ
彼別當へ玉フト也定テ是ハ女姓ノ嫉
妬ノコトヲ見ヘテ心根恐レ

筑後国肥後国洪水損度

一二十七百二十九軒 家

内三十六軒ハ侍屋敷八軒ハ寺社也

四十軒ハ 足滄以下

二千六百四十五軒ハ町人百姓等也

男女以上七人ハ流死也

馬以上十七匹 流死ス

一高曲万四百廿石余 汐入

一海辺ノ堤一万五五百六十九間崩ル

延宝六年八月五日筑後ノ国柳川領水

損如件

同月ノ同日ニ肥後熊本水損ノ覺

一田畑惣高七万六千五百七十石余

一堤六万千八百九十五間 行程ニノ廿
八里余

一井樋 二

一船大小二百三十二艘

一潰家一万三千三十九軒

一溺死 三人

一流馬 三疋

右ノ通細川越中守殿ヨリ注文之趣也

同年同月同日二豊前小倉領右日前

一汐入田畑百十町八反

一在々海辺ノ土手一万百十四間崩れ

一潰家二千八百四十二軒也

一城廻リノ堀尤破損有之

以上

右ノ小笠原遠江守ヨリノ注進ノ趣也

延宝六年九月二日二八木又左承門夏

平日不作法ニ付テ久世大和守廣之ノ

内證ニテ實父井上相摸守正任ノ御預

ケ也

高巖院様御法夏怪罪御免之夏

延宝六年十月十一日去五日高巖院様

御法夏上野ニ於テ御執行ノ節怪罪ノ

族御赦免

細田小兵衛御勤氣 永田九郎兵衛追放

岡十左承門嶋御免 堀町 守兵衛

太郎兵衛木挽町 富沢 三十郎

小石 糸 門 南弓

鈴木 庄 糸 門

小兵 糸 本取柳原
六町目

同上 勘 兵 糸

右七人追放御免也

神田鍛冶町ノ二筋 下総泉村ノ三郎

兵糸下総高柳村ノ三之允同国若白毛

村、弥兵糸同国塚崎村ノ主計同国警谷

村、半左糸門同国箕輪村ノ又七郎和及

行戸村ノ佐友四郎左糸門

右八人追放御免

名取十左糸門知行取ノ小石和村ノ名

主 治右糸門

逸見勘右糸門知行取今井村ノ名主ノ

庄兵糸

駒木根長三郎知行所高橋村ノ名主

三郎 右糸門

岩間八左糸門知行所井戸村ノ名主

九兵衛

牧野傳藏知行取油川村ノ名主

小石 糸 門

永田鍋之助知行唐植村ノ名主

權 右糸門

上総国大滝村ノ伊右糸門力女房

右七人出篋被仰付則其御免狀ヲ上野
親理院、被相渡之

延宝六年九月十月同日傳御沙汰

延宝六年九月十二日二八王寺千人以

河野与土石赤門卜出入有之二付テ御

穿鑿ノ上石十二人ノ内曲人ハ流刑十

人ハ八王子并江戸ヲ追放被仰付之

延宝六年九月十三日賜坂中務少輔安

吉惣領ノ市正安村亥病之由ニテ願之

通次男主殿安照可為嫡子旨ニ上意之

赴酒井雅乐以忠清并老中列坐ニテ中

務少輔及主殿安照江久世大和守廣之

被傳之是ニ必責ハ父安吉卜安村卜父

子ノ挨拶不和故ニ右ノ通卜同ハ夕リ

延宝六年十月廿七日ノ暮時分ニ尾張

黄門光友卿家来

小姓以

三千石

大内三郎右赤門

同役

三千五百石

松平面書

右ノ圖書一冊ノ大内三郎右赤門ニ

意赴有之付テ彼三郎右赤門ヲ討テ只

今立退申候由ヲ申テ麻ノ上下ヲ着ニ

草履取一人召列テ松平陸奥守細村ノ

上屋敷へ参りワルく下色代へ上り片
隅二和右ノ有増ヲノ候人故取次ノ
者申候ハ是ハ餘リ端近也此方へ通り
玉へ卜テ片隅ナハ小坐敷へ請ニテ様
子共ヲ委細ニ采届其后家老共へ申
候テ料理ヲ出シ然モイ夕ハリ金子五
十両遣之其夜棄物ニテ千壽迄被送之
後二承候へハ詰モノ卜十二
十月九日ニ酒井河内守忠明ノ公方家
若君降誕ノ節慕目ノ御役次ニ戸田左
門氏西至ハ御産月ノ御役被仰付之旨

今日老中被傳達之且亦酒井河内守嫡
男ノ与曲亭ノハ箭取ノ御役ニ被定之
右ノ通先御内證ト云

延宝六年十月十一日ニ馬代奉行之面
々仕曲有之二付御穿鑿ノ間支配夕儿
ノ間奏者御番衆へ御預テ取謂

板倉石見守、長谷川友七郎
酒井日向守、丸田小左衛門
松平備前守、廣沢平兵衛
土井兵庫次、久連松五兵衛
秋元根津守、井戸惣右衛門

右ノ通御預也

延宝六年右之内廣瀬平兵衛一取分私
曲有之二付于御諷系ノ上於竈屋父子
四人斬罪二被仰付之父子平兵衛惣領
二男近友甚左衛門三男近友弥市郎也
相役四人ハ竈舎被仰付之
右馬代銀入置候筈二ハ丑人ノ者凡ノ
封印ハ蚕有之内ノ銀子ハ都合二千八
百枚無之也
同廿一日二小笠原遠江守長実ヨリ御
弓墓目被差上之

今日吉辰二付于左中不残并酒井河内
守同岩千代戸田左門大奥ハ泰上御祝
有之卜云々

延宝六年十月廿三日二高宝四郎兵衛
御代官所之百姓孫石衛門一此者米宿
也御年貢永代ノ賣主也

八王子千人以河野与五左衛門組ノ六
右永門一是米宿永代ノ買主也

右ノ西輦御法度ノ相背御年貢地永代
賣買仕候ノ段令露顯付于御穿鑿ノ上
右永代買取申候田地共悉被召上二付

六右派門楨采也賣主孫右派門等八令
逐電者也彼孫右派門等數年押領之段
重科ニ付テ右ノ仕合也且亦永代賣買
仕候證人ニ立申候也加判仕候十人組
之同心御追放也同十人組ノ以萩原七
郎兵衛組ノ五兵衛采同組ノ源左派門
此兩族采宿也
同頭河野与五右派門組ノ甚五右派門
了是亦采宿也又同臥志村兵吉組久保
宿之仁右派門右四人彼横道者共ノ同
類夕ルニ付テ追放被仰付者也

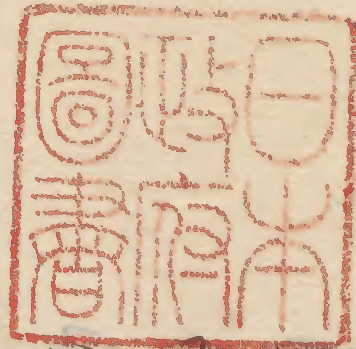
陸奥国仙臺ニ而親ニ孝盡有徳成夏

仙臺領深谷村ノ百姓父ハ年来五十七
八ニテ盲目也其子ハ三十其妻ハ廿四
右ノ夫婦ノ者彼盲目ノ親ニ至孝ノ了
近里遠村ニ其隠十キ也然所ニ彼父莫
クワル一ツコノメリ依之其子其親ヲ
背中ニ負川端ヘツレ行テ父ノ帯ニ細
引ヲ付テ後ニ杭ヲ市テソレニク、リ
付テ川ヘコケ落ヌ様ニ用心ヲ能ニテ
叔釣針ト餌ハツアテカヒ置テ焼飯ヲ
懷中サセテ其後我所作ヲ勤メケレハ

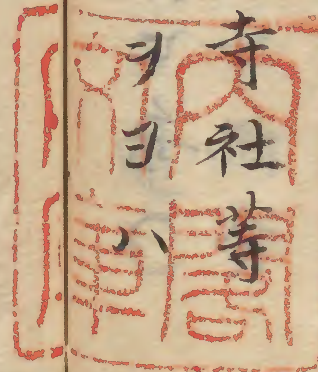
追付カレカ女房茶ヲモテ来テ咽ノカ
ワキヲ止サセテサテクニイタハル
天氣サヘヨケレハ是毎日ノ夏也自然
ニ其子ハサモ有ヘケレハ婦トメカク
諸心ニ孝ヲ尽ス上臈ニモテシテ下
臈ニハイト様ニナキナシハ地至其
国生ナリケル陸奥守細村岡及ヒ玉テ
石カレカ持来ル所ノ田地ノ高三貫余
ノ所ヲ永代作り取ニシ玉ノ猶又其耕
作料トノ小粒百廿切是金子三十兩分
也下行之有ケリ誠ニ其孝行天ニ通ニ

ケル故ニ時ニアヒケルトハ思ヒ毎ハ
夕リ

同領布留川ト云所ニ被差置タル足涇
三百人アリ其内ニテノ足涇是又六十
有余ノ母ヲ持夕リヒカ孝ヲ尽スナ
右ノ深谷ノ百姓ニ勞テシケレハ地者
ニモ一分ヲ百廿キレ玉ニケリ
同領桃生郡ノ百姓ノ喜丸永門ト云者
父母ニ孝ヲ尽スナ傳ヘキク唐土ノ廿
四孝ノ其内ノ人々モカクヤト思フ計
也然取ニ彼者国主細村ノ家臣迄一通



ノ訴狀ヲ捧ケ、ルトナニ其旨趣ハイ
 カマウノ文辭トイサシラヌ也細村披
 見有テ彼者ヲ仙臺ノ城下へ召寄玉ハ
 ハ衣裳ヲ副カミツクニ麻ノ上下ヲ着ニ家老共
 ノ前ニ平伏メ口上ノ子細共ヲ述ケル
 シ国主ニ物越ニ因玉ニ一畢テ喜た糸
 門退出ス其黄金ニ枚ヲ玉フト云々
 細村若將夕リトイヘ氏道ノ道夕ル
 シ好シ玉ニ仁愛不浅ノ慈悲ヲ專トシ
 玉ノ故領国豊ニ治リ士農工商社寺
 ニ至迄此殿千代ニセクト万歳



フトカマ

玉滴隱見卷卅一終

正徳新其書第一卷

其音起

カレウ人文辭法在中

カレウ人文辭法在中

カレウ人文辭法在中

カレウ人文辭法在中

カレウ人文辭法在中

カレウ人文辭法在中

カレウ人文辭法在中

カレウ人文辭法在中

カレウ人文辭法在中

